

ラジオNIKKEI

# マルホ皮膚科セミナー

2019年5月6日放送

「第33回日本乾癬学会 大会を終えて」

愛媛大学大学院 皮膚科  
教授 佐山 浩二

## 本学会のテーマ「さらなる高みを目指して」

本日は、2018年9月7日と8日の両日、愛媛県松山市で開催された第33回日本乾癬学会学術大会についてご報告いたします。愛媛県で乾癬学会が開催されるのは初めてのことで、全国から1,000人近い医師、研究者の方々にご参加頂き、改めて感謝申し上げます。地方開催ということで、参加者が少ないのではないかと心配しておりましたが、一般演題は150題の応募があり、過去の乾癬学会とならび最多となりました。

本学会のテーマは「さらなる高みを目指して」と致しました。今日の乾癬治療は分子標的剤の出現により、従来考えられなかったような形で、発展を遂げております。本学会では、それに満足せず、さらなる高みを目指したいという思いでこのテーマと致しました。松山市は司馬遼太郎の「坂の上の雲」の舞台ともなった街で、「坂の上の雲」のイメージとも合致するものです。また、抄録集の表紙も「坂の上の雲」のイメージから、松山城をモチーフとしたイラストに致しました。

学会の全体的な構成ですが、乾癬の治療に関してはスポンサードセミナー、あるいは、一般演題などで十分にディスカッションされると考えましたので、特に今回は病態・基礎研究に関わる内容のシンポジウム・講演に重点を置きました。また、学会賞の表彰と講演を、初日のランチョンセミナーの前に計画し、多数の参加者に見て頂けるように工夫しました。



## 特別講演

まず、特別講演1では自然免疫研究の第一人者である、大阪大学の審良静男先生をお招きして「炎症・免疫応答に関わるリボヌクレアーゼ Regnase-1の機能と制御」と題して、messenger RNA レベルで、遺伝子発現の制御を行っている Regnase-1 の機能を解説して頂きました。

特別講演2では IL-17 の同定者である、東京理科大学の岩倉洋一郎先生に「炎症性疾患発症における IL-17 の役割」と題して、炎症応答や感染防御で、IL-17 が重要な役割を果たすことを解説して頂きました。

演題数	
Greetings from Professors of Our Department	
Special Lecture	2
Symposium	3
Educational Lecture	4
Oral Presentation	150
Sponsored Seminar	17

## シンポジウム

シンポジウムでは近年急速に解析が進んでいるマイクロバイオーームに注目し、2つのシンポジウムを企画しました。マイクロバイオーームが乾癬において、どのような役割を果たしているのか、その可能性について、皮膚科以外の研究者もお招きしてディスカッションして頂きました。腸管のマイクロバイオーームは様々な疾患に関わっていることがすでに明らかになっていますが、乾癬におけるマイクロバイオーーム研究はまだ始まったばかりです。このシンポジウムが新たな研究の糸口となればと期待しているところです。

シンポジウム1は乾癬の類縁疾患である掌蹠膿疱症と腸管・皮膚におけるマイクロバイオーームに関するものです。掌蹠膿疱症と歯科疾患の関連、腸-唾液腺相関と、口腔マイクロバイオーームについては、神奈川歯科大学の槻木恵一先生にお話し頂きました。また、掌蹠膿疱症の膿疱は長らく無菌性と信じられており、実際に培養しても菌が同定されることはありません。しかし、見た目は感染症を思わせますし、扁桃炎などの感染症の関与も報告されてきました。そこで、愛媛大学の黒木香奈先生は、最新の手法を用いて、膿疱のマイクロバイオーーム解析を行ったところ、皮膚表面のマイクロバイオーームに類似するマイクロバイオーームを検出しました。完全に無菌ではなかったわけです。Andrews らが 1935 年に提唱した無菌性であるべき、とされていた掌蹠膿疱症の疾患概念を大きく変えるものとなりました。

シンポジウム2では腸内細菌とメタボリックシンドロームが、乾癬において果たす役割についてディスカッションして頂きました。メタボリックシンドローム、あるいは心血管系の疾患が、乾癬の病態と密接に関わっていることは TNF- $\alpha$  を中心とした

Psoriasis march としてすでに議論されているところです。

一方、腸内細菌とメタボリックシンドロームも直接関連があることが明らかにされています。そこで、このシンポジウムでは腸内細菌、メタボリックシンドローム、乾癬の三つ巴の関係をディスカッションしたいと考えました。

京都大学の本田哲也先生には「高脂肪食と乾癬・皮膚免疫」と題してお話し頂きました。この講演では、乾癬モデルマウスに高脂肪食を与えると、乾癬が増悪すること、およびそのメカニズムを報告され、従来から考えられてきた、食事による乾癬増悪を動物モデルでも初めて明らかにされました。

東京農工大学の木村郁夫先生には「メタボリックシンドロームと腸内細菌」と題してお話し頂きました。食物由来脂肪酸がエネルギー源であるだけでなく、シグナル分子として重要であるという、驚きのお話で、腸内細菌による代謝物と肥満に関して、分子メカニズムの点から解説して頂きました。

慶應義塾大学の長谷耕二先生には「腸内細菌と慢性炎症の制御」と題して、腸内細菌が産生する酪酸が Treg 細胞を誘導し、腸管局所の炎症反応を防ぎ、全身性の免疫応答の制御にも働くことをお話しして頂きました。乾癬のような慢性炎症に応用できる話かもしれません。



シンポジウムで、乾癬の病態における肥満の重要性を理解した後は、肥満を治療しなくてはなりません。そこで、肥満の食事指導に必要な栄養学的なアプローチを、日本臨床栄養学会理事長、白井厚治先生に教育講演でお話し頂きました。

シンポジウム 3 は Cutting Edge from the Bench と題して海外から 2 名、国内から 1 名の基礎研究をしている先生をお招きして、英語で講演して頂きました。スイス、ローザンヌ大学皮膚科からは Michel Gilliet 先生をお招きしました。この講演では IL-10 ファミリーの IL-26 に注目しています。急性期の乾癬病変部皮膚では Th17 の一部サブセットが IL-26 を産生し、炎症促進に作用しているというお話です。

また、徳島大学の山本圭先生には角化細胞の増殖制御のお話をして頂きました。角化細胞のフォスホリパーゼ A2 は IL-22 により産生され、増殖と恒常性維持に働いており、乾癬治療の標的になる可能性を示唆して頂きました。

台湾からは National Cheng-Kung University から Cheng-Che E. Lan 教授をお招きして、好中球による Neutrophil extracellular traps が乾癬病態に関わっているとの講演を頂きました。

## 教育講演、特別企画

教育講演では「医学研究における法と指針」について、筑波大学の古田淳一先生に、また指導医が若手医師をどのように育てていくのかについて、昭和大学の泉美貴先生にお話し頂きました。

特別企画として中国、韓国から乾癬研究者をお招きし Asian Psoriasis Forum を開催しました。各国の現状を紹介して頂き、研究者の日中韓の国際交流を深めることができましたと思います。

教育プログラムの J-PEARLS も例年通り開催し、また日常診療に必要な技術を若手に習得していただく目的で、ハンズオンセミナー、若手セミナーも開催しました。

文化講演として、坂の上の雲ミュージアム初代館長の松原正毅さんに「坂の上の雲」が発するメッセージを、熱く語って頂きました。



学会終了後には、恒例の乾癬患者友の会・学習懇談会も、同会場で開催されました。愛媛県で2018年度に乾癬患者友の会が設立されたこともあり、多数の患者さんにご参加頂くことができたものと思います。

## おわりに

最後になりましたが、松山市は「坂の上の雲」の中で「地味が肥え、物実りがよく、気候は温暖で、しかも郊外には道後の温泉があり、すべてが駘蕩としている」と紹介されています。学会直前には台風も来ましたが、学会期間中を通じて雨が降ることもなく、皆さまにはゆっくり滞在して頂けたものと思っております。

今回の学会が、皆さまの乾癬研究のさらなる発展に、少しでもお役に立てたならば幸いです。全国および海外からご参加頂いた皆さまに、あらためて御礼申し上げます。